

ワークショップレポート

参加者と講師からみた英語科学論文執筆の
合宿ワークショップ吉武 康栄¹⁾・篠原 稔²⁾

参加者として (吉武康栄)

「もっと上手に英語で話せるようになりたい」と思えば、英会話教室がそこら中にある。ところが「もっと上手に英語で論文が書けるようになりたい」と願ってみても、英語論文の書き方を学ぶ機会はなかなか見当たらない。英語論文の書き方は経験して身につけていくという日本人研究者が多い中、「日本人こそ英語論文の書き方を体系的に学習すべき」と、米国で十年以上研究教育活動を行っている篠原稔氏は主張している^{1,2)}。

2012年12月、その篠原氏を講師として招いた「英語科学論文執筆の合宿ワークショップ」が、鹿屋体育大学東京サテライトキャンパスおよび登録有形文化財の鳳鳴館にて、1泊2日で試みられた。参加者は女性2名を含む東京近郊の若手研究者5名と筆者。それぞれの職位は院生、ポスドク、助教、准教授など、専門は神経、筋、循環、遺伝、運動工学と立場も分野も多岐に渡っていた。

篠原氏は *Medicine & Science in Sports & Exercise* の准編集長、*Journal of Applied Physiology*、*Journal of Electromyography & Kinesiology*、*Journal of Motor Behavior* などの主要国際誌の編集委員を務め、アメリカ生理学会主催の同様な合宿ワークショップを受講した経験もあることから、講師には適任であった。

ワークショップの“ワーク”は、ワークショップ以前からはじめていた。まず、1週間前までに論文草稿を提出するという参加条件があり、その“しぼり”は大きなモチベーションとなり論文執筆に力が入った。この第一課題が終わってほっとする間もなく、執筆や査読に関する課題資料が届き、参加者全員の論文草稿計6編を1週間以内に熟読し問題点を列挙する、という第二課題に熱を注ぐことになった。この事前集中ワークによって頭の中は英語論文モードになり、独りよがりの興奮状態を実際のワークショップで一刻も早く昇華させたいという期待が高まった。

ワークショップ当日は、まず、“英語で”“科学”“投稿”論文を執筆するという特殊性に関する根本的なコンセプトと、“ストーリー”の重要性について念入りな説明が行われた。それは、日本語論文を書いたり刊行された英語論文を自分で参考にしたりする場合とは、大きく異なるとらえ方であった。そして、そのコンセプトに基づいてストーリーとして論文を作り上げていく順序、各パート(要約、緒言、方法、結果、考察、図表)での記述法の根本的注意点などが、「なぜ、そのようにすべきなのか」という論理的な理由の説明とともに具体的に取り上げられた。その内容は論理的に体系化され、かつ実践的な技術の伝達であった。

特筆すべき点は、参加者それぞれの論文草稿に

筆者：1) よしたけ やすひで (鹿屋体育大学准教授)

2) しのはら みのる (ジョージア工科大学アソシエートプロフェッサー)

関し、重要な問題点を各パート・章ごとに具体的に指摘しあい、講師が修正すべき方向性を明確かつ論理的に説明していったことにある。これは、上っ面だけのマニュアル本や民間業者による英文校正、もしくは指導教員からの赤ペンチェック風添削などからは得ることが難しい。自分たちの問題点の「具体的」な指摘を直に受け、記述する術（思考法）を「論理的」に指導してもらったのである。ワークショップに実際に参加してみないと本当に実感できないのであるが、スポーツ現場にたとえるなら、選手の間違った動きが一般的な言葉だけで注意されて指導されるのと、実際にお手本となるプレーを目の目で披露され、身体に触れて間違った動きを論理的に修正されて指導されるのでは習得効果が違う、という例に通ずるだろう。

加えて、参加者同士でもお互いの論文草稿の問題点や修正法を指摘し合い、年齢や経験を基にした上下関係や分野の枠を超えて議論を重ねたことも、本ワークショップの大きな収穫であったといえる。このような投稿前に他グループの研究者の論文草稿を熟読かつ問題点を率直かつ建設的に指摘・ダメ出しするような機会や、それについてさらに論理的な説明を受けられる機会は日常的ではなく、非常に新鮮で刺激的であった（写真）。

「今までは何となく勢いだけで執筆していたのだが、執筆手順やポイントが明確になった」「日本人特有のミス等がわかり、気をつけなければならないポイントが学べた」という他の参加者たちからの感想、そして「指導する立場となった場合に、どう指導していけばよいのかというお手本が示された講義だった」ことは、今後わが国の身体運動科学分野を担う若手研究者にとっては有意義なワークショップとなったに違いない。合宿ワークショップ終了時には、まるで参加者全員が戦友になったかのような錯覚に陥ったのは筆者だけであろうか。かつ、今後誰が一番早く論文を投函するかを競い合う雰囲気になったことも、ポジティブ効果であろう。

今回は、1泊2日という限られた中での論文執筆ワークショップであったが、アメリカ生理学会

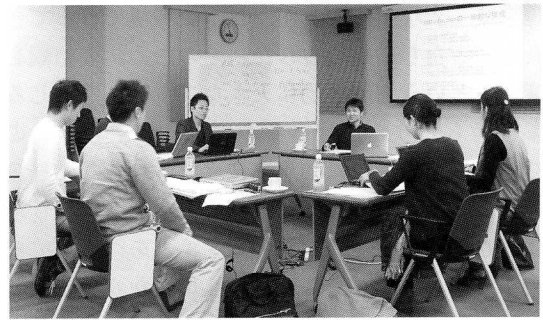


写真 ワークショップの様子

主催のそれは、3泊4日で講師1名につき受講者4、5名という高密度で行われるらしい²⁾。英語を母国語とする研究者ですら、切磋琢磨して論文執筆のためのレシピを学んでいる。今後、わが国の学術界においても、さらにアップグレードされた形、たとえば在米在英の邦人プロフェッサーを里帰りついでに招聘するなどして、このようなワークショップを通じて多くの若手研究者が英語科学投稿論文特有の執筆技術を学び、科学技術大国日本の再興、そして頭脳国際循環³⁾に寄与してほしいと願わずにはいられない。

講師として（篠原稔）

英語科学論文を正しく執筆する技術の習得は、体育教官だった筆者がアメリカに渡ったときに掲げた、アメリカ標準研究者になるためのトレーニングの一項目であった⁴⁾。そのようなトレーニングが日本でも受けられるようになることを願い、アメリカ生理学会主催のワークショップを日本人向けにアレンジして試してみた。これまでに関連のレクチャーは行ってきたが¹⁾、今回はワークショップという形により、一方向的なレクチャーだけでは伝えにくい、「英語で」「科学」「投稿」論文を執筆するという特殊作法に関する重要性やその具体的な理解や方法を、実感として伝えることができたと思う。

ワークショップでは、英語科学論文執筆に対するこれまでの考え方を修正し、新しい考え方で論

理構築し表現することが、日本語環境で育ってきた参加者たちに求められた。そのため、価値観を変えると知覚的活動に大きなストレスを感じる参加者もあり、自分自身がアメリカ生理学会のワークショップ中に知恵熱にうなされたことを思い起こした。ワークショップを合宿形態で行う理由のひとつには、ソーシャルタイムをつくってそのようなストレスを解放させ、気楽な心身状態と何でも言い合いやすい人間関係をつくり、その中でより密にワークしたり質問し合ったりしながら合理的に学んでいこうという目論みがある。

今回の試みで、6人程度の日本人を対象とした1泊2日合宿ワークショップの実行可能性が示された。ただし、英語科学論文のお作法を「一通り」身につけるには時間が足りず、2泊3日の時間が必要であることがわかった。今回のワークショップは、吉武康栄先生のご尽力による第5回「身体運動の科学・合宿ワークショップ」⁵⁾として小規模で行われた。この試みでの経験を共有し、今後は、アメリカ生理学会の例²⁾のごとく、多分野に渡るより多くの受講者を対象に、レクチャーとワークが複数の講師に効率的に分配される合宿

ワークショップが、より大きな学会レベルで企画実現されることを望む。

謝 辞

このような素晴らしい国際交流事業に助成を賜った(公財)中富健康科学振興財団に深く御礼申し上げます。

〔文 献〕

- 1) 篠原 稔: 英語圏で働く国際誌エディターから見た英語科学論文の執筆と審査—英語科学論文の「お作法」の重要性—。体力科学, 61: 365-368, 2012.
- 2) 篠原 稔: アメリカ生理学会主催「科学論文執筆 & 査読の合宿トレーニング」の参加報告。日本生理学雑誌, 74: 69-70, 2012.
- 3) 篠原 稔: 頭脳国際循環時代に若手研究者が育つための基本三要素—職務と時間と刺激—。学術の動向9月号: 60-62, 2008.
- 4) 篠原 稔: 体育教官のアメリカ標準研究者トレーニング。日本生理学雑誌, 68: 446-447, 2006.
- 5) 林直享ほか: 体育・スポーツ科学の発展的総合化を願う「身体運動の科学」合宿ワークショップ。スポーツ科学研究, 6: 111-115, 2009.

メタボリックシンドローム解消ハンドブック

- ◆ 田畑 泉 (立命館大学スポーツ健康科学部教授) 編著
- ◆ A5判・144頁/定価2,205円(本体2,100円+税5%)

運動指導者が現場ですぐに活用できる実践書。まずは内臓肥満に関する正しい知識を有してもらい、改善に向けた方策(運動・行動変容・栄養(食事))を活かせるよう解説しています。また、プログラム例や罹患者に対して運動を指導する際の注意点、薬の禁忌なども掲載しているため、幅広い層に運動を指導する際に役立ちます。

978-4-7644-0063-4



(株) 杏林書院